

言語活動を通した、児童の思考力・判断力・表現力の育成 —中国の現地校・インター校での英語教育カリキュラムや実情を踏まえて—

前上海日本人学校虹橋校 教諭

島根県邑智郡美郷町立邑智中学校 教諭 堀 あかね

キーワード 在外教育施設、中国、英語教育、小学校の英語、言語活動

赴任校の概要（令和7年4月時点）

上海日本人学校虹橋校

Shanghai Japanese School HongQiao Campus

<https://srx2.net.cn/sjs-hq/>

児童生徒数：986人

1 はじめに

私は本校赴任前、島根県の2つの中学校で6年間英語科担当教諭として勤務した。大学でも英語教育を専攻しており、子どもたちにとってより良い英語教育の在り方について考えてきた。特に2020年度より新学習指導要領が全面実施され、小学校英語教育にも大きな改訂があったことは知っていたので、実際の現場でどのように指導しているのか関心があった。

上海日本人学校虹橋校で勤務した3年間のうち、1年目は第2学年担任、2年目と3年目は英語専科を担当した。1年目は、学級担任をしながら英語の授業を週1時間行っていた。当時、英語専科教員が作成した指導案をもとに、学級担任とALTによるチームティーチングスタイルでの英語の学習指導だった。この授業計画・実践スタイルを1年経験し、本校の英語教育の在り方や授業について疑問や改善の余地があるように感じた。その後英語専科を任され、本校赴任前の日本での中学校英語教師としての経験を生かしつつ、本校児童のより良い英語教育に向けて取り組んできた。その中で私が大切にしていたことが「言語活動を通した、児童の思考力・判断力・表現力の育成」である。言語活動の充実によって、児童の思考力・判断力・表現力がさらに育成されたと考えたため、今回の研究のテーマとして設定した。

また、実際に現地校やインター校を視察する中で、どんな言語活動を取り入れているのか、掲示物や授業ルールはどのようなものを設けているのかなど、英語教育の現状について調査し、帰国後の日本での指導に生かしたいと考えた。

2 児童の実態

本学年の児童は1年生から外国語活動の時間が週に1時間あり、虹橋校独自の英語カリキュラムに基づいて学習を進めている。1、2年生のカリキュラムは、3、4年生の学習内容を踏まえ、英語科で独自に考え作成したものである。授業においては、教師の問いかけに多数の反応があり、ペアや班で話し合う活動などもお互いに活発に意見を交換することができる。1年生の時から様々な教科でタブレットを用いて学習に取り組む経験を積んでおり、タブレットを効果的に活用して写真や作成物を見せながら相手に考えを伝えたり、聞いたりすること

ができる。特に、話すことに対する意欲が高く、人とコミュニケーションをとることが好きな児童が多いため、ペア活動やグループ活動にスムーズかつ積極的に取り組むことができる。

3 研究テーマ

“言語活動を通した、児童の思考力・判断力・表現力の育成

—中国の現地校・インター校での英語教育カリキュラムや実情を踏まえて—

「言語活動を通した、児童の思考力・判断力・表現力の育成」をテーマに設定した理由は、話すこと・聞くことが中心の小学校英語活動こそ、言語活動の充実が図られると考えたからである。中学・高等学校へと進学すると、話すこと・聞くこと・読むこと・書くことの四技能をバランスよく身に付けることが重要になってくる。もちろん中学・高等学校での英語教育においても、言語活動の充実を目指す、小学校英語活動においては「～について発表しよう」「クラスメイトと～について伝え合おう」などの自分の考えや思いを表現する言語活動を主活動に設定しやすいと感じた。単元目標を発表、伝え合うというゴールを示しているからこそ、すべての言語活動において、自分の伝えたいことをどのように伝えるか思考・判断する。さらには、その内容を相手にわかりやすく表現しようとする。この活動こそが児童の思考力・判断力・表現力の育成につながると考えたため、今回の研究のテーマとして設定した。

4 授業実践・気づき(2023年度)

(1) 低学年(2年生)の授業での言語活動

身の回りにある身近なものについての英語の語彙を増やすことを今年度初めに目標としていた。具体的には、1年を通して、食べ物、動物、色、形、数など身近なものを用いて各単元で10～20語の習得を目指した。前期はその用語を用いたゲーム形式の活動が多かったが、後期からはICT端末を活用した発表またはやりとり形式の話す活動を主活動として設けた。例えば、食べ物の単元では「お弁当箱カード」、形の単元では「オリジナルロボット」など、自ら作成したものを用いて他の児童とコミュニケーション活動に取り組んだ。

このような活動形態に変えることで、児童の「相手に伝えたい!」という気持ちを強く感じ、取り組みの姿勢もさらに意欲的になったように感じた。また語彙の定着だけでなく、各活動でKey Sentenceを与え、さらに対話的で実生活に近づいた活動を展開することができた。

(2) 中学年(3年生)の授業での言語活動

今年度初めに計画していた帯活動の工夫として、前期中盤から“Hon Chat Chat”と題したOne minute chatに取り組んだ。身近なお題について英語で1分間相手とやり取りをする活動である。質問はこちらで用意するが、答えは児童それぞれが好きを選んで良い。この活動を繰り返し行うことで、既習表現がさらに定着されるだけでなく、タイムレース形式でお互いに競い「さらに話せるようになりたい!」という児童の気持ちの変化も見られるようになった。休み時間も互いに練習したり、教え合ったりする姿も見られるようになった。この活動は児童の表現の幅を広げるために有効であったと考えられる。

また教科書を活用しつつ、各単元の主活動として低学年と同様ICT端末を活用した発表またはやりとり形式の話す活動を後期から設けた。「英語名札」を作成して自己紹介をしたり、「果物・野菜クイズ」を作成してクイズ大会をしたりした。このような表現活動を通して、学習指導要領の外国語活動(思考力・判断力・表現力等)の目標である「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを

伝え合う力の素地を養う」ことができたように思う。

(3) 高学年（6年生）の授業での言語活動

6年生も3年生と同様、“Hon Chat Chat”と題したOne minute chatを帯活動として取り入れた。既習表現を復習したり、英語が得意な児童が苦手な児童に教えたりする姿が見られ、外国語学習への抵抗感を減らすためにも有益であったように感じた。

また計画していたPicture Talkは取り入れることができなかったが、各単元で2～5回のSmall Talkを取り入れた。単元で扱われている題材をもとに、例えば食材の栄養素について触れ夕食のメニューについて考える単元では“What did you eat for dinner yesterday?”、小学校生活での一番の思い出について考える単元では“Did you enjoy (行事名)?”など、関連付けて行った。また、より日常の会話に近づけたり表現の幅を広げたりするために、理由を表す“because～”の表現や疑問詞を用いた質問をして、会話を広げるよう伝えた。2分以上は英語で会話を楽しむ児童が増えたように感じた。

このような表現活動を通して、学習指導要領の外国語活動（思考力・判断力・表現力等）の目標である「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う」ことができたように思う。

5 授業実践・気づき（2024年度）

(1) 年度初めに定めた重点項目

今年度は前年度資料等を参考にし、年間単元表を作成して、それに基づいて授業を計画し、日々の授業づくりを行った。しかし教科書や副読本のない2年生の学習は、ALTと相談しながら「さらに児童にとって身近で、日常会話に近い語彙や表現」に近い学習内容へと、年度途中に度々変更した。また、それぞれの学年での重点項目として取り組んでいきたい事項を年度初めに定めた。

①低学年（2年生）の授業の重点項目【表1】

まずは昨年度の既習語彙もあるので、さらなる英単語の語彙の定着を目指す。表の“vocabulary”にある語彙分類を、それぞれの単元においてKey sentence（基本文）とともに定着を目指す。またその際に、5、6年児童の所持しているPicture dictionaryに記載されている英単語に準じて指導し、各単元において10～20語程度の語彙の定着を目指す。

日付	レッスン番号	Key sentence	vocabulary
4月	1	Hello!	greeting phrase
5月	2, 3 4, 5	How are you? How old are you?	adjectives about your feeling number(1-20)
6月	6, 7	How is the weather today?	weather(sunny, cloudy…)
7月	8, 9, 10	What's this / that?	color
8月	11, 12, 13 14	What do you like? What is she? What is your job?	color, animals jobs
9月	15, 16	Do you like?	fruits, veggies
10月	17, 18 19	Do you like? Halloween lesson	fruits, veggies Halloween words
11月	20, 21 22, 23	What's wrong? How many?	body parts number(1-20), shapes
12月	24 25, 26 27	How many? What do you want? Christmas lesson	number(1-20), shapes food(hamburger, french fried…) christmas words
1月	28, 29, 30	What do you want?	food(hamburger, french fried…)
2月	31, 32, 33 34, 35	Can you? Thank you!	sports family members
3月		上記の学習予定で、不足している単元を補う	
※赤字は年間途中の変更事項			

【表1】

さらに、「2ziチャレ」（※年度途中にほめチャレに変更）と題した1～3つのレベル別表現を毎授業提示し、ペアやグループ活動時に活用する。この積み重ねにより、表現の幅を広げ英語での自然な対話に近づけるねらいがある。

②中学年（3年生）の授業の重点項目【表2】

低学年で培った語彙の量をさらに増やしつつ、帯活動のさらなる充実・発展を目指す。具体例としては、今年度も継続してOne minute chatに取り組み、既習表現の定着や日常に近い話題で児童同士の対話を大切にしていく。さらに2年生と同様、「TRYトライ」(※年度途中にほめチャレに変更)と題した1～3つのレベル別表現を毎授業提示し、ペアやグループでの活動時に活用する。

日付	レッスン番号	教科・単元名	Key sentence	vocabulary
4・5月(4月22日の週～)	1	Unit 1 Hello!	Hello! What's your name? I'm ~. I like ~.	greeting phrase
5・6月(5月13日の週～)	2,3 4,5	Unit 2 How are you?	How are you? I'm ~.	adjectives about your feeling
6・7月(6月17日の週～)	6,7,8 9,10	Unit 3 How many?	How many (数)?	number(1-30)
8・9月(8月12日の週～)	11,12 13,14	Unit 4 I like blue.	Do you like ~? I like ~.	color, animals sports, food
9・10月(9月9日の週～)	15,16,17 18,19	Unit 5 What do you like?	What ~ do you like? I like ~.	color, animals sports, food
10・11月(10月28日の週～)	20,21 22,23	Unit 6 Alphabet		A-Z(大文字のみ)
11・12月(11月25日の週～)	24,25 26,27	Unit 7 This is for you.	What do you want? This is for you.	adjectives about your feeling shapes, vehicles
1・2月(1月13日の週～)	28,29 30,31	Unit 8 What's this?	What's this? It's ~.(Quiz)	adjectives about your feeling shapes, color, animals sports, food
2・3月(2月17日の週～)	32,33,34	Unit 9 Who are you?	Are you ~? Yes, I am./ No, I'm not. Who are you? I'm ~. Who am I?	animals, shapes body shapes

※クリスマス前にクリスマスレッスン実施予定(レッスン番号35)

【図2】

③高学年（5年生）の授業の重点【表3】

これまでの既習単語や表現を確認しつつ、新たな語彙や表現の習得を目指した帯活動を展開する。まずは、当該児童たちが昨年度も取り組んでいるOne minute Chatを活用する。後期以降はSmall TalkやPicture Talkといった、積極的に自分の考えや思いを伝える活動を、帯活動で取り組む。また、自分の考えや思いをただ伝えるのではなく、相手の意見に対して質問をしたり、リアクションを返したりすることの大切さを伝え、相手とのコミュニケーションを楽しむ雰囲気づくりも意識する。これらは特定の言語において大切なことではなく、どんな言語においても必要なコミュニケーションの基盤のひとつであると言える。双方が気持ちの良いやりとりになるよう、声掛けをしつつ基盤づくりを行う。

日付	レッスン番号	内容	備考
4月	1,2,3	Unit 1 Hello, friends.	
5月	4~8 9~12	Unit 1 Hello, friends. (5月13日の週まで) Unit2 Happy birthday! (5月20日～)	Unit1 ⑧レッスン
6月	13~16	Unit2 Happy birthday! (～7月8日の週まで)	Unit2 ⑫レッスン
7月	17~20 21,22	Unit2 Happy birthday! (～7月8日の週まで) Unit3 Can you play dodgeball? (7月15日～)	Unit3 ⑧レッスン
8月	23~28	Unit3 Can you play dodgeball? (～8月26日の週まで)	
9月	29~34	Unit4 Who is this? (9月2日～)	Unit4 ⑧レッスン
10月	35,36 37~42	Unit4 Who is this? (～10月8日の週まで) Unit5 Let's go to the zoo. (10月14日～)	Unit5 ⑧レッスン
11月	43,44 45~50	Unit5 Let's go to the zoo. (～11月4日の週まで) Unit6 At a restaurant. (11月11日～)	Unit6 ⑧レッスン
12月	51,52 53~56	Unit6 At a restaurant. (～12月2日の週まで) Unit7 Welcome to Japan! (12月9日～)	Unit7 ⑧レッスン
1月	57~60	Unit7 Welcome to Japan! (～12月20日の週まで)	
2月	61~68	Unit8 Who is your hero? (2月4日～2月24日の週まで)	Unit8 ⑧レッスン
3月	69,70	まとめ	

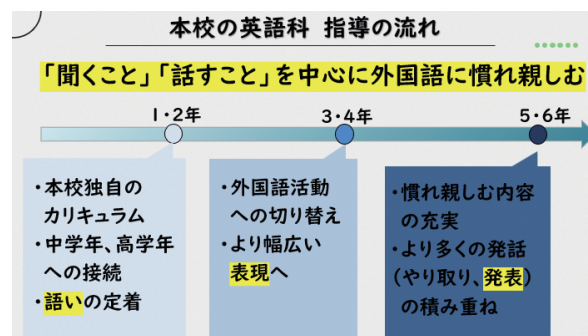
【表3】

さらに、2、3、5年生共通して、常に児童の言語活動に対して肯定的評価を伝え、英語によるコミュニケーションを図って良かったと実感できる学習活動を展開することを意識する。相手との会話を楽しみつつ、相手が理解しやすくなるために、自分の考えや思いをさらに深めようとする思考力・判断力・表現力が育った児童の育成を目指し、授業づくり・実践を行った。

(2) 本校英語科 指導の流れ

これらの重点項目を留意しつつ、下学年で学んだ語彙や表現をさらに上の学年で活用し、レベルアップした内容で学習するように、全学年を通して系統性をもたせることを意識した指導の流れを作成した。

まず1、2年の英語科の学習は、学習指導要領上必須の科目ではない。よって本校では、独自のカリキュラムで指導に当たっている。特に語彙の定着を意識



し、中学年・高学年に繋がる学習を目指している。例えば、1年生で野菜・果物の単語を10個程度学習し、表現としてDo you like～?を学習する。その後2年生では同じ単元でレベルアップし、学習する単語を20単語に増やし、表現としてはWhat fruits do you like?やWhat vegetable do you like?を追加する。このようなスパイラル学習を通し、少しずつ難易度が上がった内容にも学級全体が取り組むことができた。

そして3、4年では、外国語活動として位置づけられ、文部科学省発行の教材“Let’s try”を活用して授業を行った。低学年で身に付けた語彙や表現をさらに活用し、英語で発表をしたり、友達と英語で意見を交流したりする活動を設定している。

最後に本校においては、NEW HORIZONという教科書を活用し、語彙や表現に慣れ親しむために様々な活動を取り入れている。高学年になればなるほど、1対1のやり取りではなく、全員の前でのプレゼンテーション形式での発表の活動を設定し、お互いの経験や考えについて話をする場面を設けている。様々な発話の経験を積み重ねられるよう意識し、活動を設定している。

(3) 言語活動を設定する上で大切にしたこと

言語活動を設定する上で大切にすることは4点ある。

①「楽しい!伝わる!面白い!」活動の設定

英語は言語であり、伝わることの楽しさや、英語で相手と繋がることの喜びを、児童には感じ取ってほしいと考えている。まずは活動が児童にとって楽しいものになるよう、「失敗してもいいよ!チャレンジしてみよう!ナイストライ!」と伝えながら授業をした。もちろんゲーム形式でクラスメイトと競うことで、楽しさや面白さを感じる活動を設定することもある。しかし、一番児童に感じてほしいことは「英語で伝わることの楽しさ」や、「相手と英語で繋がることの喜び」である。お互いの思いや経験を英語で話しながら、さらにお互いを知ることができるような活動を設定するよう意識した。

②アウトプットの場면을多く設ける

私自身学生時代、英語は「単語や文法を覚える」ものという英語学習=インプット中心という意識が強かった。しかし、実際に聞いたり話したり、英語が「使える」児童の育成を目指すと考えたとき、ただ単語や表現を覚え、ALTの英語を繰り返し真似するだけでは、実際に英語が「使える」ようにはならない。学んだ語彙や文を使って、実際に友達と考えや思いを交流できる活動を設定し、児童のアウトプットの場면을各授業に設けた。

③iPadの活用

iPadは、児童にとって、自分の考えや思いを表現するためのツールである。iPadの使い方を指導しつつ、iPadを活用してインタビューをしたり、自分の作ったものを紹介したりする活動を設定した。中・高学年の発表形式のプレゼンテーションでの発表の仕方を学習するために、低学年時からiPadを相手に見せながら話することや、指をさしたりジェスチャーを入れたりすると相手にさらに伝わることも、授業の中で指導した。

④「日常に関わりのある場面・活動」を設定

児童にとって日常の会話に近い題材や、スキットを言語活動の題材として設定した。これは、英語で他者と繋がることが楽しいと感じる活動への仕掛けである。

例えば、店員役、客役という立場になりきらせて活動に取り組ませた。それぞれの立場になりきることで、会話がより自然なものになり、ジェスチャーや商品を指さすなどの非言語的コミュニケーションも会話

の中に取り入れる姿が見られた。そして、児童の気持ちを販売活動形式の言語活動へとスムーズに切り替えるために、教室横の廊下をショッピングモールと見立てて、買い物に出かけることとし、場面の移動も設けることでさらにリアルな場面に近づけた。また、中国の地では、電子決済が主流であるため、支払いには擬QRコード決済を用いて行った。これらの仕掛けにより、英語で繋がることに楽しむ姿が見られた。実生活に近い活動は児童にとっても意欲が沸き、前向きな学習姿勢が多く見られた。

また、実際休み時間の会話で、「あっ英語の時勉強した〇〇だ!」と発言する様子も見られ、日常の中に英語が浸透する姿が見られ嬉しくなったことがあった。このように学校の授業の中だけで英語を学習するのではなく、日常生活の中でも使える「生きた英語」の習得を目指した。

6 現地教育視察研修を通して（インター校 HQIS校）

2024年12月24日、上海市にある Shanghai Hongqiao International School Japanese Department (HQIS 日本人小学部) へ上海日本人学校虹橋校の現地教育視察研修として出向いた。この学校は「児童の『好き』を大切にし、一人ひとりの個性を伸ばす。3つの生きる力（自律性・人間性・国際性）を身に付け、なりたい自分になり、社会に貢献する」という教育方針のもと、学校経営を行っている。2023年4月に設立され、現在は1年生、2年生の計17名が在籍している。元々、インターナショナルスクールの中に日本人小学部が新設されたこともあり、多国籍の児童を相手に英語での授業を展開している。

(1) 設備面について「日常会話に繋がる掲示物」

学校内の案内をしていただき、視察をした。様々なカラフルな掲示物が学級内や廊下に飾られていた。その掲示物それぞれが、児童の成果物や学習の応用・補助的内容であった。

また、掲示物を児童が見た時、児童同士で会話がさらに広がるような仕掛けが多々あった。天気や曜日など、日本語でも会話の中で出てくるような話題についての掲示物や、回して考えるなどの工夫があった。

日本に帰国し勤務する学校でも、こういった児童が触れて話題にしやすいような、身近な掲示物を作成したいと感じた。

(2) カリキュラムについて

HQIS日本人小学部では、国語・算数は日本語にて授業を展開している。それ以外の教科は英語での学習を進めているようだ。これがIB教育と呼ばれる、イマージョン教育である。多言語の環境で学習を進めることで、自然に言語力が高まることをねらいとした取り組みである。クラス担任も主に中国人教員が担うことで、日々の生活から外国語が飛び交う環境が作られている。

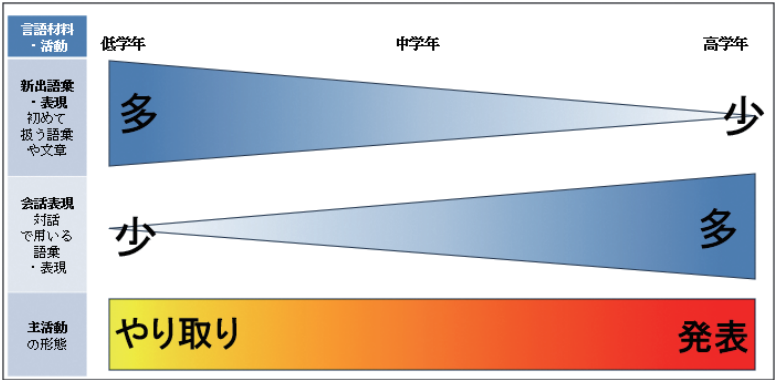
また、時間割の中に、Inquiry や、マイプロジェクトといった探求学習を設けている。これらは児童の好奇心、興味、問いや課題を出発点に創り上げる探求型学習である。これらが独自の取り組みであり、大変興味深かった。

公立学校で働いている限り、文部科学省の定めた学習指導要領に沿った教育が求められる。働くうえでインターナショナルスクールのようなカリキュラムを学校独自に設定することは中々難しいが、学級活動や総合的な学習の時間の中で探求型学習など取り入れていきたいと感じた。

7 終わりに

今回の調査・研究を受けて、主活動で設定する言語活動の重要性・有用性を改めて感じた。英語教育の目的は、「小学校、中学校、高等学校を通じて、コミュニケーション能力を育成すること」である。コミュニケーション能

力を高めるためには、実際に英語を用いて、互いの気持ちや考えを伝え合う言語活動の経験を積むことが必須であると感じた。ただ対象児童の年齢や実態に応じて、言語材料や言語活動は精査する必要がある。今回の研究のまとめとして、【表4】の3点の気づきがあった。



【表4】

まず、新出語彙・表現（初めて扱う語彙や文章）は、低学年であればあるほど多く、学年が上がるにつれて少なく設定することだ。今年度2年生の学習では、毎単元基本10～20語程度の新出語彙を提示し、練習した。初めはその多さに苦手意識を感じる児童もいるが、繰り返し声に出したり、ゲーム形式でミッシングゲームやクイズゲームなどに組み込んだりしていくうちに、気づいたら絵からそれが何か英語で言えるようになっていた。さらにその語彙や表現を用いて、言語活動に取り組んだ結果、新出語彙・表現の確実な定着が見られた。

次に、会話表現（対話などの言語活動で用いる語彙や表現）は、低学年では少なく、高学年に上がるにつれて多く設定することだ。前提として、どの学年においても、新出語彙の全てを会話で使うのではなく、児童の伝えたい内容に合わせて、語彙を選ぶことができるような言語活動を設定している。様々な言語活動を経験していくうちに、高学年ではこれまでに習った語彙や表現を思い返ししながら、様々な問い返しやリアクションもできるようになる。これは、学年が上がるにつれて思考力・判断力・表現力やコミュニケーション能力の向上が見られるともいえる。よって、学年が上がるにつれて、難易度を上げて対話量を増やすことが適切であると感じた。

最後に、言語活動の形態としては、低学年ではやり取りが中心、学年が上がるにつれて発表の場面を増やすことが適切であると感じた。友達と1対1で会話することは、日常生活においても大変多くある場面であり、児童にとっての取り組むハードルも低い。一方で発表形式は、自分1人の話をその他全員が聞くことにより、緊張感が生まれ取り組むハードルを高く感じる児童も多くいる。しかし、予め自分の意見や考えを全体の前で発表するというタスクを何度も伝えることにより、児童生徒が取り組む言語活動自体の現実性や本気度が上昇する。ただ英語という母語ではない言語での活動であるため、難易度がさらに高く感じる児童もいると感じた。しかし、そうした経験を積み重ねる中で徐々に自信がつくので、低学年から年間数回は主活動として設定し、学年が上がるにつれて増やすことが適切だとも感じた。また、全体での発表形式だけでなく、ペアや3、4人の小グループから始めて、話すことの抵抗感を感じることなく、楽しんで活動に向かわせるという工夫も忘れてはならない。児童の中には、教師が想像している何倍も緊張する特性をもっている者もいる。日本人にとって、他者に向けて自分の意見や考えを発表すること、表現することが得意とは言えない国民性であると考えられる。しかしながら、即興性のあるスピーチや場に応じた表現力は、今後の社会においてこれまで以上に必須の能力となるであろう。

これらの研究で感じ学んだことを、今後の勤務校でも生かし、児童生徒のコミュニケーション能力の育成に必要な思考力・判断力・表現力の育成をめざした英語教育に向き合っていきたい。